

星月夜の恋人

M i o & S y u n i c h i

藤谷 郁

Iku Fujitani

termity



エタニティ文庫

目次

星月夜の恋人

5

書き下ろし番外編

幸せの日向ひなた

343

星月夜の恋人

駅を出ると、小雨がばらついていた。

「午前中は晴れてたのに、やっぱり梅雨ね」

未央はため息をつくとき、営業用のポストンバッグを肩に掛け直し傘を差した。

社用車を使うほどの荷物では無いので電車で移動することにしたのだが、製品カタログや見本、販促品などを詰め込んだバッグはずしりと重い。片手に傘を持つとかなりこたえる。

(しょうがない。行こう)

ラバーローファーを履いた足を前に出し、濡れ始めた歩道を早足で進んだ。

今日から七月、週始めの月曜日。梅雨入りして三週間になる。

毎日毎日、雨が降ったりやんだり、はつきりしない天気が続いている。テンションも下がりがちだが、仕事中は無理にでも上げていかなければならない。

未央は美術大学を卒業後、美術・デザイン画材の製造販売を業務とする、吉野画材株

式会社に就職した。神戸に本社を置く老舗メーカーである。

営業職を希望した未央は、新宿区のビルに事務所を構える東京営業所に配属された。

就職して八年。街の小さな画材店から、クリエイティブ部門を持つ大企業まで、様々な顧客を担当してきた。

もしかしたら気が抜けてしまう時期なのかもしれない。小雨くらいで憂鬱な気分になるなんてこれまではなかった。

だが、理由はそれだけではないと未央は知っている。

美術に関わるこの仕事は好きだし、売上に成果があれば充実感を得られる。だから、仕事そのものが問題なのではない。

朝から晩まで同じスケジュールで、昨日と変わらない一日。

変わらない私――

それが、不安なのだ。

これから先、いつまでこの生活を続けるのか。恋愛も結婚も、夢もないままに。

今年の秋に三十歳となることが、さらに焦りを生んでいた。今時アラサーで独身なんて珍しくもないけれど、二十代という瑞々しい響きには未練がある。

梅雨のはつきりしない天気にも、このどうしようもない焦りと不安が増幅させられていた。

「しっかりしなきゃ」

気を引き締めるため、声に出して己を叱咤する。どんな気分であろうと、顧客には常に笑顔で接するのが営業の基本だ。憂鬱な顔などもつてのほか。

これから向かうのは未央にとって初めての訪問先だ。顧客に与える第一印象には、特に配慮しなければならぬ。

(国枝アート工房……か。なんだか緊張してきた)

工房主の国枝三郎は、雑誌やポスター広告のイラストレーションを多数手掛けている有名アーティストだ。和を題材にした美麗なイラストが人気で、未央も画集を持っている。

少し癖のある人物ということで、通常はベテラン営業部員が担当している。

病欠の担当営業マンに代わり、画材を届けるよう上司の関根課長に言われたのだが……

『すまない！ 本当に悪いんだけど、今日は私も出張で、頼めるのが君しかないんだよ』

営業部員は課長を入れて八名いるが、未央の他は勤続十年以上の男性ばかりである。

助っ人を要請されることは滅多にないものの、今日は未央以外のメンバーに余裕がなかったため指名されたのだ。

『構いませんよ。商品をお届けするだけですから』

『大丈夫だとは思いますが……何かあったら、すぐに電話しなさい』

『はい、お任せ下さい』

大袈裟な仕事で手を合わせる課長とのやり取りを思い出し、未央はぶつと噴き出した。

未央が美術大学の学生だった頃、癖のある人々やちよつと変わった人は周囲を見回せば普通にいた。何かあったらなんて心配しすぎだ。

それに、どんなに癖のある人物であろうと、会社にとっては大切なお客様である。

「すべてのお客様に、心を込めて誠実なサービスを」という吉野画材の社訓は、未央の信条でもあった。

(誠心誠意、誠実に……と)

呪文のように唱えるうちに、目的地に着いていた。

大通りに面して構えるモダンな建物が、国枝アート工房だ。入口横の壁面にスチール製の看板が掲げられている。

未央は軽く息を整えて、腕時計を確認する。約束の時間どおりであることにホッとした。気分は憂鬱でも、身体は営業部員としてちゃんと働いているのだ。

雨足が強くなってきた背後の通りをちらりと見やる。もう少し時間が遅かったら、服もバッグもずぶ濡れになるところだった。

(あ、別のお客さん?)

通りの向こうから白のワゴンが近付いて来て、事務所横の駐車スペースに入った。国枝は人気アーティストであり、きっとスケジュールもタイトなのだ。

(早く納品してお暇しよう)

未央は傘を閉じるとくるくると巻いてホックを留め、ポーチに置かれた陶製の傘立てに挿した。

手が空いたところで、身だしなみを素早くチェックする。後ろで一束に縛りバレッタで留めた髪は乱れていない。ジャケットについた雨粒を、ハンカチで軽く押さえる。

「よし、頑張ろう」

気合を入れてからドアホンのボタンを押すと、男性の声が応答した。会社名と名前を告げると、『横のドアからどうぞ』という返事が届く。

準備を整えた未央はポストンバッグをきちんと持ち直すと、静かにドアを開けた。中に入ると受付カウンターがあり、その向こうが事務所のようだ。

聞いた話では、事務所奥には二階まで吹き抜けになった広いアトリエがあるという。そのためか微かに絵具の匂いがした。未央はそっと息を吸い込む。未央の好きな匂いだ。

待ちわびたように受付カウンターに立っていたのは、国枝だった。事務員の姿は見当たらず一人きりのようだ。未央は急いで名刺を取り出して、カウンター越しに挨拶を

した。

「初めまして。吉野画材の中森と申します。本日は担当村瀬の代わりに伺いました。よろしく願います」

「へえ、吉野画材さんって、あなたみたいな若いコもいるんだね。枯れたおじちゃんばかりだと思ってたなあ。まだ二十代でしょ?」

「は、はい……一応」

国枝は四十代半ばの中年男性で、太り気味の体型をしている。画集に掲載された近影どおりの丸顔は、にこやかで愛想がよかった。狸の置物のようなユーモラスな外見は癖のあるアーティスト、という雰囲気ではない。

それにしても若いコなどと言われて少々居心地が悪い。未央は速やかに納品作業を始める。

「ご指定のアクリル絵具、エアブラシのハンドピースをお持ちいたしました」

「急に悪かったねえ。近所の画材屋さんでも買えるんだけど、おたくに頼んだほうがお値打で便利だから。ほんと、申しわけない」

「いえそんな、とんでもないです。いつもご注文をいただきありがとうございます」

未央が納品書を取り出すのと、国枝がその手を握ってきたのは同時だった。見かけによらない素早さに、未央はぼかんとする。

「え？」

「ごめんね、中森さん。ちょっと見せてもらえない？」

国枝は未央の右手を両手で支え持つと、真剣な表情で観察し始めた。

「いやあ、白魚シロイサナのように美しい。うーん、イメージが湧いてきたぞ」

「は、はあ」

カウンターのの上に納品書がばらりと落ちる。未央は驚きながらも、これがアーティスト国枝三郎の癖なのだと思います。

「素晴らしい。これこそがボクの求めている女性の素肌だ。ああ、今すぐにも写し取りたい！」

国枝の手のひらは汗ばんでいる。じつとりとした感触は正直不快だが、未央は自分に言い聞かせた。国枝に他意はない、これはアーティストとしてのやむにやまれぬ衝動なのだ。

「悪いんだけど、中森さん。デッサンさせてくれない？」

「デッサン……私の手を、ですか？」

国枝は満面の笑みで頷くと、事務所の奥を顎あごで指した。アトリエで、ということだ。

「頼む、助けると思っつて。芸術アートのためなんだ、協力してくれないかな」

「芸術……」

——心を込めて誠実なサービスを。

（どんな癖があるうとこの方はお客様で私は営業部員。きちんとお付き合いしよう）

「分かりました。多くの時間は取れません」

「おお、ありがとうございます！ じゃあ早速案内するね。さ、どうぞどうぞ」

国枝はカウンター内に未央を招くと、あらためて手をとった。

未央は緊張しながらも、インスピレーションを得たらしい芸術家に、大人しく右手を預けた。

ピンポン

ドアホンの音が割り込んだのは、アトリエに入る直前だった。

国枝は舌打ちをすると、「ちょっと待っててね」と未央に笑いかけてからドアホンの応答ボタンを押した。片手は未央の手を握ったままである。

「はいはい」

「国枝先生、おはようございます。アド・ブライツの倉本くらもとです」

やや低めだが、滑舌かつせつのよい男性の声が聞こえてきた。

「えっ、倉本くん？ もうそんな時間か」

モニターで来客を確認した国枝は、しばし考えるように黙りこむ。

「ごめん、事務所に入って待っててくれる？ 打ち合わせの準備をしておいてよ」
『分かりました』

先ほど駐車場に入った白のワゴンでの来客がこの声の主だろうと、未央は気付いた。

(アド・ブライツといえば大手の広告代理店だわ)

未央は、浜松町に建つ高層ビルを思い浮かべる。広告業界では一、二位を争う大企業だ。

国枝は一流のアーティストであり、大きな仕事の依頼も多いのだろう。美大生時代、絵描きとして生きる人生を夢見ていた未央にとっては尊敬の対象である。さすがという思いで国枝を見直した。

「では再開しましょうね、中森さん」

広告会社の人を待たせていいのだろうかと心配して振り返るが、国枝にぐいぐい引つ張られるままアトリエに入った。

噂どおり、天井が吹き抜けの広々としたスペースだった。窓からの採光や配置されたライトで、部屋は隅々まで明るい。

正面の壁には制作途中らしき巨大なキャンバスが立てかけられている。床には絵具、パレットといった基本的な画材の他に、ペットボトル大のスプレーや、筆を束にして投

げ込んだバケツなどが置かれていた。

まさに工房といった豪快な光景に、未央は圧倒された。

「素晴らしいアトリエです！」

「ありがとうね。でも、そんなことより」

国枝は未央の手を自分の両手で包むと、ぎゅっと握りしめてきた。異様に強い力に、思わず顔をしかめる。

「あ……あの？」

国枝の顔つきが変わっている。事務所では愛想もよく普通の態度だったが、今はそうではない。ぎらぎらとした目つきで、鼻息も荒い。顔中汗だくになっている。

未央はびくっとするが、冷静に考えようとした。

(こんな経験は美大生時代にもあった。普段は穏やかでやさしいのに、絵を描き始める和别人のように気短きみかになる先輩とか。きつと、芸術家モードにチェンジしたのね)

それにしても、尋常ではなく興奮している。アトリエに入ったことでインスピレーションが高まり、燃えてきたのか、それとも——

「デッサンは後にして、形を確かめさせてもらおうね」

国枝は言うなり五本の指を絡めてきた。ぬるぬるとした感触に生理的嫌悪感を覚え、未央は小さく悲鳴を上げる。

「大人しくしてて、ね、いい子だから」

「くっ、国枝先生？」

「きれいだなあ。キミ、画材屋なんてやめてボクの専属モデルにならない？ 優遇するよ」

「え……」

今の言葉はどういう意味だろう。理解しかねている未央に、国枝は補足した。

「キミみたいに若くて上品できれいな女性って、ドストライクなんだよねえ」

「はあ？」

突然、課長の言葉を思い出す。

『何かあったら、すぐに電話しなさい』

(何かって、こういうこと？ 国枝三郎の癖って『女癖』だったの？)

唇をすばめて追ってきた。もう間違いない。これは芸術家モードではなく、変態モードだ。

「困ります。おやめ下さい！」

「今さら何よォ。ここまでついて来たってことは、ちょっとは気があるんだろう？ さつきも懂れの眼差しでボクを見てたじゃない」

国枝は握力を増して指を締めてくる。未央はもがいたが逃れられず、顔だけやつと背

けた。頬にねっとりとした唇が触れようとしている。

「いやあっ」

「国枝先生、準備が整いました。打ち合わせを始めましょう」

未央の悲痛な叫びに、静かで落ち着いた声が重なった。

「へ？」

シンとしたアトリエに、国枝の間の抜けた返事が響いたのは数秒後。

未央は国枝の力が緩んだ隙に指を解いて飛び退き、変態の暴走を止めてくれたその人を確かめる。

上等なスーツを身につけた若い男性。いかにもエリートビジネスマンといった風情。

この人が、大手広告代理店アド・ブライツの――

「くっく、倉本くん！ 困るなあ、事務所待っててくれと言ったでしょう」

取り乱す国枝に、倉本はしごく冷静な様子でこの場に現れた理由を述べる。

「約束の時間です」

にこりと微笑み、国枝の正面にゆっくりと進んだ。

年齢は未央より少し年上だろうか。きれいな鼻梁に、黒目がちの目。顔立ちは優しげだが、凛々しい眉が男らしい印象を与えている。

背が高くバランスの取れた体格も、男性としての魅力に溢れている。物語に出てくる

騎士のような行まいたなすのその人に、状況を忘れて未央は見惚みとれてしまった。

「国枝先生」

「な、なんだね。ここはボクのアトリエだぞ。勝手に入って来るなど……」

「本日お持ちしたのは、私どもアド・ブライツ企画営業部が総力を挙げて取り組む重要なプロジェクトです」

倉本の穏やかでありながらも厳しい口調に、国枝の興奮度が急降下していく。「総力』『重要な』という言い方がプレッシャーになったようだ。

「正式に引き受けていただけると、ありがたいのですが」

「ちよ、待ってくれよ。そんなの、話を聞いてみないことには」

国枝はたじたじだが、倉本は構わず続けた。

「国枝先生への依頼は部長の本庄ほんじょうの意向でもあります。制作チームも精鋭を揃えようと、本庄自ら動いていますよ」

「え、あの本庄さん……が？」

「はい。大ブッシュです」

「く、倉本くん、そういうことは最初に言ってくれなきやー」

なぜか国枝はみるみるうちにご機嫌になった。

倉本は再びにこりと笑う。それはおそらく勝利の笑みだが、未央はわけが分からず蚊か

帳やの外である。

「それじゃ、早速打ち合わせに入ろうかね。そうか、本庄さんがボクをねえ」

「ええ、頑張りましょう。一分一秒も無駄にできません」

二人は未央を置いてけぼりにして立ち去ろうとした。国枝の魔の手から解放されたはいいが、このまま空気抜かきいでは敵かたわない。

「あ、あのつ、国枝先生」

国枝は足を止め、「えっ？」という顔で振り向いた。倉本も立ち止まったが、彼は振り向かない。というより、さつきからずっと未央を眼中に入れていない。

国枝の白々しい惚とほけ方に、未央はぐっと拳こぶしを握り締める。あんなことをしておいて、何ごともなかったかのように振る舞うなんて。

しかし、どう言えばいいのか分からず口ごもっていると、国枝はぼんと手を打った。

「あー、ごめんねキミ。なんだっけ。そうそう、納品に来たんだよね」

国枝に促されて事務所に戻ると、彼は伝票に素早くサインして受領書を渡してきた。

未央の指に触れた手のひらは、嘘のように乾いている。

「じゃ、またね」

（またね……って、それで済ませるつもりなの？）

国枝に対する尊敬の念は消え去り、怒りがこみ上げてくる。イメージが湧いたとかス

ケッチしたいとか、ぜんぶ嘘だったのだ。芸術への純粋な思いを利用された。未央にとつて、とてつもなく大きな屈辱だった。

恨めしげな目で追っていると、倉本がいきなり未央の前に立ちはだかり視界を遮った。
(えっ!?)

「先生、少しお待ち下さい。車に荷物を取りに行ってきます」

彼は国枝に声をかけてから未央に近寄り、そして背中を押すようにしてドアの外に連れ出す。

有無を言わさぬ勢いに、未央は逆らう間もなかった。

外に出ると、大粒の雨が地面を叩いていた。

未央は倉本とポーチで向かい合う。雨の音に包まれていると、段々落ち着いてきた。そしてようやく気がついたのだ。彼が国枝から助けてくれたことを。

「大丈夫？」

「はい、ありがとうございます。ご迷惑をお掛けしてすみませんでした」

縮こまりながらも感謝と謝罪をし、名刺を出してあらためて挨拶をした。彼は黙って受け取り、名刺と未央を見比べている。

「吉野画材と言うと、老舗のメーカーさんだ。それにしても、上手くない対応だっ

たね」

「……申しわけありません」

未央は再び頭を下げる。率直なマイナス評価に打ちのめされるが、まったくもつてそのとおりなのだから仕方ない。

また、彼には迷惑をかけるどころか貴重な時間を奪ってしまっている。今、この時も。「国枝先生は優れたアーティストだけど、多彩な癖の持ち主でね、女癖の悪さはそのひとつ。車の中から君を見かけて、危なっかしいなとは思ったが」

入り口のドアの前で身だしなみを整えていた未央を、倉本は観察していたらしい。入社八年目、営業経験を積んだつもりが、危なっかしいなどと言われて未央はへこむ。

「なぜアトリエについて行った？」

「それは……」

未央は言葉を詰まらせるが、正直に答えるべきだと思った。分かってもらえないかもしれないが、

「誠実な仕事をするためです」

案の定、倉本は呆れ顔になる。

「君は、誠実な仕事のためなら身を差し出すのか」

「そんなつもりはないです。ただ、芸術の助けになるのならって」

倉本の指摘はきついで、的を射ている。情けなくて声が震えた。「これからは気をつけるんだね。不用意な営業は会社の利益を損ねる」

そのとおりと、未央は痛感していた。逆切れされて取引停止にでもなったらどうする。国枝三郎の発言は現代アートの世界で強い力を持つ。そんな彼に吉野の製品を悪く言われたら？

未央はそつと顔を上げ、あらためて倉本を見た。そんなピンチからもこの人は救ってくれたのだ。

凛々しい眉の下にある黒い瞳は、美しく澄んでいる。

「何？」

「は、いえ……」

つい、吸い込まれるように見つめてしまった。知らず頬が熱くなり、胸が高鳴ってくる。

彼に助けってもらって、このまま済ませてもいいのだろうか。いや、そんなわけにはいかない。社会人としてだけではなく……。未央は、理性と感情がごちゃまぜになった気持ちで彼に申し出た。

「本当にすみませんでした。その、もしもご迷惑でなかったらお礼をさせていただきますのですね」

「それには及ばないよ」

倉本は眉をひそめ、なぜか冷たい視線になって未央を見下ろす。

「言っておくが、君を助けたわけじゃない。あの状況を自分の仕事に利用しただけ。それよりも、ああいった男にはもつと毅然と対応することだ」

厳しい口調で言うと、倉本はドアを開けて事務所に入ってしまった。

激しい雨音に、胸の高鳴りも掻き消される。ポーチに取り残された未央は呆然として、しばらく動けなかった。

あれは、『今後君と関わるつもりはない』という意思表示だ。

倉本と名刺交換して後日あらためてお礼をしたいと未央は考えていたのだが、名刺はもらえなかった。つまり身をかwasされた。いや、拒絶されたのだ。

「そうか。そうよね」

上等なスーツ。現代アート界の雄である国枝三郎に対する堂々たる態度。トラブルにも落ち着いて処置できる能力。彼は、大手広告代理店アド・ブライツの敏腕営業マンなのだ。

吉野画材は老舗メーカーとはいえ、企業としての規模は彼らの足元にも及ばない。未央は営業所勤務のヒラ社員。しかも、彼の目の前で失態を演じている。まともに相手をされるわけがない。

夕暮れの電車に揺られながら、雨に滲む街をぼんやりと眺めた。今日は一日、気がつけば倉本という男性のことはかり考えている。

助けてくれたこと、冷たくされたこと。そして何よりも、美しく印象的な黒い瞳。電車にブレーキがかかり、身体が傾いた。ポストンバッグは行きに比べれば軽いけれど、形がごついでバランスを取りにくい。ふらついて肩をぶつけた隣の乗客に、未央はぺこぺここと謝った。

『君を助けたわけじゃない』

そうかもしれない。あの時、倉本は国枝の行為を止めてくれた。未央を助けた格好だけれど、やはりあれは状況を利用しただけなのだ。女性に乱暴しようとした現場を押さえられた国枝は、彼に対して弱腰だった。

営業マンとしてのレベルが違う。

未央がお礼をしたいと申し出たのは、彼と関わりたいという下心もあったからだ。それを見抜かれ拒絶された。何よりも、あんな目に遭った直後にそんなヨコシマなことを考えるなんて営業部員として情けない。そして恥ずかしい。

(そうだ、私は仕事でミスをしたんだ)

ずーんと気分が重くなる。結局のところ、国枝のセクハラを見抜くことができなかった未央の失態だ。敏腕営業マンへのお礼より、自分の未熟さをまずは反省しなければ。

営業所に着く頃には雨は上がっていたが、未央の心はどんよりしていた。

関根課長には、国枝アートの工房での出来事をあらかじめ報告しておいた。彼は未央からの電話に、「あちゃー」と嘆いたけれど、失態を責めはしなかった。

それどころか、疲れて帰社した未央にコーヒーを淹れて労ってくれた。これには未央も驚いた。課長手ずから一杯に憂鬱な気分もやわらぐが、ここまでしてくれるのには理由があるはずだ。

「ところで、どうして国枝先生の癖を前もって教えてくれなかったんですか？」

そこはきっちり究明しておきたかった。コーヒーでうやむやにされてはいけない。

「そ、それはだね」

ぼそぼそと課長の口から出たのは、国枝三郎は『三十を過ぎた女には興味がない』という衝撃の事実だった。

「いやあ、国枝先生の数ある拘りのひとつでね。だから、中森くんはその、そろそろ大丈夫かなど。でも国枝先生には若く見えただねえ。良かったね、なんて言ったら不謹慎だけでも。はは……」

さすがに気まずいのか、冗談も笑いもぎこちない。

国枝は女性を年齢で振り分ける人だった。だから『まだ二十代だよね』と未央に確認したのだ。

不愉快な話だが、そのところはきちんと教えておいてほしかった。

(それに、私はまだ二十九歳なんですけど！)

複雑な心境だが、アラサーには違いない。未央は文句と一緒に罪滅ぼしのコーヒーを飲み干した。

「ところで、その広告マンはいいのかね、お礼をしなくても」

「はい。かえって迷惑な様子でしたから」

自分で言っておきながら、未央はその言葉に傷付いていた。落ち込んだ気分を散らすように首を横に振る。

(そんなことより、仕事を頑張らなくちゃ。私はまだまだ半人前。憂鬱だなんて言っちゃいけない)

業務報告書を作成し、明日の準備を整えてから退社した。

ビルを出ると、再び雨が降っていた。傘を開く前に夜空を仰ぐ。

ぶ厚い雨雲の上には、無数の星が輝いているはず。今、ここからは見えないけれど……

未央は煌めく星々を想像し、あの人の姿を重ねる。

スーツの肩先に光る雨粒すらも、彼の優美さを演出する宝石だった。未央は吸い込まれるように見惚れ、胸の高鳴りを覚えていた。

彼にひと目惚れをしたのだと自覚する未央だが、傘を広げると小さく息を吐く。見えない星ではなく現実を見るべきだ。

歩道を行く人の流れに混ざると、未央は意識的に頭を切り替え、もうひとつのことを考え始める。それは、倉本に対するのはまた別の胸の高鳴りで、大切な想いだった。

散々な目に遭ったものの、国枝の本格的なアトリエに未央は刺激を受けていた。美大生時代、絵画の制作に明け暮れていた日々を思い出す。画家になることを夢見た、あの頃……

(そうだ、久しぶりに美術館巡りをしよう。遠くに出かけてスケッチするのもいい) 長い間忘れていた感情が、雨のように降り注いだ一日だった。

首都圏のベッドタウンと呼ばれる千葉県北西部の町に、未央の実家はある。

生まれ育った町を離れ家を出たのは、大学進学するとき。未央は上京し、大学近くの寮に入ったのだ。

木造二階建ての古い学生寮は、画学生向けの造りになっていた。個人の部屋のほかに広いアトリエがあり、学生が集まり思い思いに絵画を制作していた。

天井が高くスペースも広かったので、大型キャンバスを持ち込んで大丈夫。換気がいいので、オイルの匂いもこもらなかった。

(課題に追われてよく徹夜したなあ。制作は大変だったけど、楽しかった)
日曜日の朝、未央は出かける準備をしながら懐かしく思い出す。卒業して七年にもなるのだ。

大学卒業後は寮を出て、東に十駅ほど離れた三鷹みたかに引っ越した。寮の近所に住み続ける仲間もいたが、未央は手ごろな家賃の1DKのアパートを探した。

通勤に便利だからという理由もあるが、本音は、大学の近くには住みたくなかったのだ。

(かといって、遠く離れることもせず。中途半端よね)

会社帰りにデパートで衝動買いたしたワンピースに着替える。白地に小花を散らした可愛らしい柄だけど、V字襟が大人っぽい。未央の年齢相応のデザインで、着痩せする体型にもほどよくフィットしている。

コーデインネットに満足すると、次はメイクを始めた。相変わらずの曇り空なので、ミントグリーンのアイシャドウを選んで目もとに施すほどこす。涼しげな色合いに、爽やかな気分になった。マスカラも口紅も、いつもより時間をかけて丁寧に仕上げていく。

ひと粒パールネックレスを飾ると、ゆるくカールした髪をふわりと垂たらして準備完了。

鏡の前に立つと、久しぶりにお洒落しゅれした自分が少し照れくさい。大学時代に付き合っ

た彼と、初めてデートしたときの姿が重なる。その彼との関係は、卒業とともに自然消滅したが。

(エッチもしたけど、恋人というより友達だったのね、多分)

胸が苦しいほどときめき、その人に会いたくて堪たまらないのが恋のはずだから。きつと……

「さ、行こうって」

今日肩にかけるのは、ごつくて重たいポストンではなく、小ぶりなチェーンバッグだ。去年の今頃、有名ブランド店で買ったのだが、彼氏ができてから使おうなどとあてのない予定を決めて取っておいた。でも、考えてみれば予定は未定だし、型も古くなってしまっているので、使わなければもったいない。それと同じことが、未央の生活パターンにも当てはまる。

平日は職場とアパートの往復のみ。その上休日まで部屋に閉じこもっていては、出会いなんてあるはずもない。それこそ、どんどん古くなっていくばかりだ。憂鬱ゆううつな自分を打破したいなら、変わらなくては。

そして、過去に囚とわれていては夢も持てない。

未央はいても立ってもいられない気持ちでこの一週間を過ごした。あんなふうにかきめいたのは初めてだった。忘れようとしても忘れられない。

生活を、自分を変えたなら、あの人にまた会えるような気がする。初めてのデートに出かけるみたいになくわくしながら、アパートのドアを開いた。

未央はまず上野に向かった。

国立西洋美術館は学生時代に何度も訪れていたが、今日は久しぶりのため、新鮮な気持ちで作品を鑑賞することができた。

十九歳の未央に衝撃を与えた西洋絵画は、当時と変わらず深い美しさを湛えている。

しかし、未央も少しは大人になり、落ち着いたためだろうか。あの頃は絵具の肌合いや質感といったマチエールにばかり気を取られていたが、今は適度な距離で鑑賞できる。美大を卒業してから遠のいていた美術館巡りは、思いがけない自分の成長を教えてくれた。

(でも、少し寂しいかな)

未央は、今でも時々絵を描いている。鉛筆画や水彩画を、スケッチブックに気の向くまま。だけど、いつも描きかけて終わってしまい、学生時代のような拘りも高揚感もなし。それは感性が乏しくなった証拠だ。

最近になって、油絵だったらまた違うのだろうかと考えようになった。

しかし、油絵を制作するには未央のアパートは換気が悪く、環境的に不向きだった。

部屋に油絵具や溶剤の匂いが染み付いても困る。

かといって、街の絵画教室に通うとか屋外で制作するとか、そこまでする気力も湧いてこない。

——君の絵はつまらないね。

気力を取り上げてしまうのは、ひとつの記憶。

描きたいのに描けない中途半端な夢。過去に囚われていては夢も持てないと分かっているけれど、未央の心にはまだ傷が残っている。

「……移動しよう」

建物を出ると、今にも雨が降り出しそうな曇天のもと、彫刻が点在する前庭へと歩き出した。

それほど広くない庭の右手からゆっくりとひと回りする。ロダンのブロンズ彫刻、地獄の門に差し掛かった時、雨が降り始めた。周囲にいた客は慌てて、建物の下へと走っていった。

(朝は晴れでも、やっぱり雨、か)

未央は念のために用意してきた傘を差す。新緑の木々を打つ雨音が賑やかになり、先

日のことか思い出された。できるものならもう一度彼に会いたい。会ったところで相手にされないだろうけれど。それに、そもそも彼には恋人が——もしかしたら奥さんが、いるかもしれない。第一彼はもう未央のことなど覚えていないだろう。それでも、一瞬でもいい。彼の瞳に映り込んでみたい。

(倉本さん……か)

顔と苗字、勤め先、そしてクールな態度。それ以外何も知らない人なのに、思い出すだけでどきどきする。懸命に忘れようとしても、切なくなるばかりだった。

彼に会うために、国枝アート工房の周辺で待ち伏せでもしてみようか。なんなら彼の勤め先まで行ってみようか……馬鹿げた考えを浮かべては即座に打ち消す。そんなの、異性に最も嫌われる行為だ。

理想的なのは、偶然再会すること。未央は幾通りものパターンを考え、その後の展開を都合よく妄想したりする。

「またお会いしましたね」

(そう、たとえばこんな感じに声をかけられて……え?)

雨音に交じり、男性の声が聞こえた気がする。

(後ろから声でしたけど……今のは私に?)

さつきまで、未央の他に誰もいなかったはず。未央の心臓は早鐘はやねを打ち始める。倉本

にそっくりの、静かで落ち着いた声。まさか……

彼のことがかり考えているから、神様が引き合わせてくれたのだろうか。いや、そんな夢みたいな話、あるわけがない。妄想するくせに、未央の思考はこんなところで現実的だった。

だが——

「せっかくのご縁ですし、よろしければ、美術館のカフェでお茶でも飲みませんか」

間違いなく、現実。そしてこれは、倉本の声。

(やつぱりそうなの? でも、どうしてこんなに好意的に話しかけるの? じゃなくつて、ああ、本当に倉本さんなの?)

震える手で傘の柄つかをぎゅっと握りしめた。

勇気を出して、未央はそうと振り返る。そこにいるのは……

「うっ」

あまりのギャップに未央は絶句した。まるまるとした顔と体型。シャツのボタンが千切れそうなほど腹がせり出している。倉本とは似ても似つかぬ、それどころか国枝を連想させる狸こも風中年男だった。

(彼そっくりの魅惑的な声の持ち主が、こんな狸おじさんだなんて、酷ひどすぎる!)

見も知らぬ相手に失礼なことを考える未央だが、それは落胆の反動による混乱だ。期

待しすぎてばくばくしていた心臓が収まらない。

「ね、いかがですか」

「……すみませんが、人違いです。私はあなたを存じません」

男の手がさっと伸びて、未央の首を掴んだ。見かけによらぬ素早さは、正に国枝ばり。

「ひっ」

「まあまあ、いいじゃないですか。奢りますから、ちょっとだけ付き合ってください
いよ」

強く引つ張られ、怖さのあまり未央は思いきりその手を振り払った。弾みで傘の柄が男に当たり、「ぎゃんっ」と悲鳴が上がる。

「ごめんなさいっ。失礼します」

美術館の庭を飛び出すと、公園の並木を振り向かずに行った。

（あれは知り合いを装って近付くナンパだ。そんな相手にまともに受け答えるなんて聞抜けすぎる。倉本さんに再会するなんて、身の程知らずな願望を持ったからだ！）

——この門をくぐる者は一切の希望を捨てよ。

地獄の門の銘文が追いかけてくる。泣きそうになりながら未央は逃げた。聞抜けでもないから、希望だけは持ちたかったのだ。

未央は急いでアパートに帰ろうと電車に飛び乗った。しかし、さっきの男につけられていたらと不安になり、降車駅を変えることにした。三鷹を通り過ぎ、途中で乗り換え、もつと先の駅で降りるのだ。

外を見ると、あんなに降っていた雨がもう止んでいた。せっかくお洒落したのに、髪もメイクも雨風で崩れてしまった。未央は車窓から目を逸らすと、惨めな気持ちで俯いた。

ここは学生時代によく利用した駅。寮からさほど離れていない懐かしい場所に、未央は降り立った。そつと後ろを窺うが、男につけられている様子はない。ホッとして時計を確かめると、正午を回っている。

（これからどうしよう）

未央はしばらく迷っていたが、駅前の風景を眺めるうちに、気がつけばふらりと歩き出していた。学生時代の思い出が次々に蘇り、何十年ぶりかで故郷に戻ったかのように胸がいつぱいになる。

「変わってない。あの頃のままだわ」

電車で傘を忘れてきたと気付いたのは、再び雨が降り出してから。

商店やビルが建ち並ぶ通りで雨宿りするひさしを探すが、適当な場所が見つからない。

少しためらったが、本降りの雨に追い立てられて、未央はとある建物に駆け込んだ。
——とよだ画廊——

レンガ風の外壁に木枠の窓。昭和レトロな三階建てビルは、あの頃と変わらぬ佇まいを見せている。

モスグリーンのドアを開けると、独特の静けさが未央を包んだ。

ここは学生時代、たびたび訪れた画廊だった。地元作家を中心とした個展が定期的に開催されており、教授が勉強のためにと学生達を連れてくるのだ。

画廊に併設されたカフェでお茶するのも慣例で、教授はいつもカフェオレを注文していた。『パリの香りがする』と、楽しそうに笑っていた。

(つい入ってしまったけど、どうしよう)

展示会は開かれていないようで、通常営業のフロアは客も数えるほど。すぐにオーナーが未央を見つけ、近寄って来た。

「いらつしやいませ。外は大変な雨ですね、よろしければタオルをお使い下さい」

「あつ、いいんです。私は」

「さあ、ご遠慮なく。風邪を引いてしまいますよ」

「すみません……」

激しい雨に打たれ、髪も服も濡れている。未央は差し出されたタオルを使わせても

らった。

人の好い笑顔で応対するオーナーの豊田よまだとは、七年ぶりの再会だ。

細面に丸眼鏡、四季を通じてタートルネックにジャケットという定番スタイルは変わらない。しかし頭髮には白いものが目立ち、七年前に比べてずっと年を取って見える。

「あれ……もしや」

豊田は未央が誰なのか気づいたようだ。未央は服装の乱れを直してから挨拶をした。

「こんにちは、ご無沙汰しております、中森と申します。平賀美術大学に在籍中は、大変お世話になりました」

「ああ、やつぱり。炭窯教授の教え子でいらした……」

未央が頷くと、豊田はぼんと手を打った。

「そうそう、中森さんだ。ええと、七年ぶりでしょうか。いやあ、見違えましたよ」

豊田は未央が戸惑うほど喜んでくれた。近況を訊ねられ、画材会社の営業をしていると話のだが、意外なことに豊田はそのことを教授から聞いて知っていた。

「中森さんのことは印象に残っています。教授がずいぶん可愛がっておられた」

「……いえ、そんな」

急に居心地が悪くなるが、すぐに出て行くことはできない。窓の外は土砂降りの雨で、雷鳴まで聞こえているが、未央は傘を持っていないのだ。

「教授はお元気ですよ。今でも学生さんと一緒に、たびたび訪れて下さいます」
「そうですか……お変わりないですね」

少し安心する。未央にとっては複雑な思いを抱いている人物ではあるが、元気なのは何よりだ。

「ごゆっくりどうぞ。よろしければカフェでお寛ぎ下さいね。メニューは相変わらずですが」

いたずらっぽく片目をつむる豊田に頭を下げる。雨宿りのためにたまたま立ち寄っただけなのに、温かく接してくれる。学生時代と変わらぬ親切がありがたかった。

未央は展示室を見学することにした。

（私は絵が好きだった。特に、炭窯教授の油彩画に傾倒していたな）

板張りの床をゆっくりと進む。展示されているのは画廊が取扱う作品の一部だが、多様なイメージの油彩画が揃っている。すべてフラインアートと呼ばれる絵画だ。フラインアートとは、実用的な目的を持たない純粹美術である。例えば広告は、情報を伝えるという実用目的を持つが、フラインアートにはそういったものはない。そのためいずれの作品からも芸術性を追求した奥深さが感じられる。

有名画家による作品は、ほとんどのキャプションに売約済みの印がついていた。

（相変わらず素敵な作品ばかり……ん？）

ふと、足を止める。

階段脇の目立たない場所。他の作品と離れた壁に、一枚の海景画が展示されている。

と言っても、六号キャンバスの側面にはテープが貼られただけで、額装もされずキャプションも見当たらない。売り物ではないようで、妙な展示方法だった。

だが、未央は強い力に引かれるようにその絵に近付いていた。
（これは夜の海。光ひとつない景色はすべてが蒼い）

手前には角ばった陸が走り、海を直線で切り取っている。ぼつんと置かれた濃色は、沖の鳥影。画面の大半を夜空が占めている。

端正な構図に、ナイフのみで描かれたかのようにシャープな肌合い。

寒色の景色に、未央は目を凝らした。

なぜか熱を感じる。

星も月もない夜のなかに、今にも噴き出さんばかりの熱情がこもっている。

展示室に飾られたどの絵画とも異なる、異端児的な存在感。

サインを探すと、右下隅に『S・K』と黒い絵具で記されていた。タイトルも制作者も不明な絵に、ますます引き寄せられて動けない。ミステリアスな魅力だった。

「また、お会いしましたね」

背後から突然声がした。長いこと絵に見惚れていた未央は、雷に打たれたように飛び

上がった。

『マタ、オアイシマシタネ』
(嘘……)

背筋がぞつとして、足が硬直する。未央は振り向くこともできない。

西洋美術館の前庭。地獄の門で聞いたのと同じ声、同じ声、同じ台詞。間違いのない、あの中年男である。

駅にはいなかったはずなのに、まさか、こんなところまでつけられていたなんて。信じたくない未央に、男の声がさらに近づく。

「君とはご縁があるのかな」

「ご縁——ご縁ですって？」

同じ手口でしつこくナンパしてくる、そのあまりの図々しさに未央は怒りを覚えた。驚きよりも恐怖よりも、強く湧き上がる感情に身体が震える。

(国枝三郎といい、どうして立て続けにこんな目に遭わなきゃならないの。しかも全然タイプじゃない狸こねきみたいなおじさんばかり。会いたい人には会えないのに)

震える手でバッグのチェーンを握り締める。

『ああいった男には、もつと毅然きぜんと対応することだ』
本当に会いたいと願っている彼の、厳しい口調が未央を促す。はつきり断ってやれと

忠告していた。バッグを武器にして構えると、未央は振り向きざまに言い放った。

「いい加減にして下さい。あなたのような方は好みではありません。お断りしますっ」

勢いのわりに気弱な声だが、静かな画廊には大きく響く。豊田も居合わせた客も驚いたらしく、未央に注目が集まった。

だが、一番驚いたのは当の本人だった。

「倉本……さん」

「好みではない、か。まあ無理もないね、出会いがあれだったし」

突然のことすぎて、頭が追いつかない。この状況で本人が登場するなど想像もできなかった。神様のいたずらにもほどがある。

「す、すみませ……あ、でもどうして。さっき地獄の門で、って、そうじゃなくて。狸が……」

しどろもどろで喋るほど混乱してくる。

「狸？」

「あつ、違うんです。ちょっと、今日はいろいろとありまして」

「国枝先生が化けたとでも？」

「えっ？ いいえ、まさかそんな」

未央が焦ると、倉本はクスクスと笑った。なぜかとても機嫌がいいようだ。

この間とは別人のように柔らかな物腰だけど、どこからどう見ても絶対に倉本である。混乱しながらも未央は確信できた。出会ってからこれまで片時も忘れることができなかった、夢にまで見た双眸そうぼうに未央が映り込んでいる。

「中森さん、どうかされましたか。彼が何か失礼なことでも？」

豊田が近寄って来て、心配そうに未央と倉本を見比べる。それこそナンパでもされたと思われたのだろう。

「いいえ、違うんです。私が勘違いをしまして……お騒がせしてすみませんでした」

未央は豊田と他の客達に頭を下げた。絵を鑑賞する静謐せいひつな雰囲気壊してしまったのだ。

「俊しゅんいちくん、彼女は炭窯教授の教え子です。失礼のないように頼みますよ」

「ええ、『教授がずいぶん可愛がっておられた』中森さんですよね」

未央は豊田と顔を見合わせる。倉本は、二人が話すのを聞いていたのだ。ということ、さつきからここにいたということ。まったく気がつかなかった。

（そういえば今日はスーツじゃない。そのせい？）

ネイビーのカットソーにジレを合わせ、黒のストレートパンツ。ラフだけど崩れすぎないスタイルだ。きちんとしたスーツ姿も素敵だが、休日モードもセンスが良い。

（下の名前はしゅんいちっていうのね）

豊田は倉本を『しゅんいちくん』と呼んだ。二人の親しげな様子から、普段からの付き合いなのだ。未央は推測する。

「ところで中森さん、俊しゅんいちくんとはお知り合いなんですか？」

「え、あの」

豊田の質問に未央は口ごもる。

仕事先で出会ったのだが、仕事の関係者ではない。知り合いと言うより迷惑をかけてしまった相手である。倉本の態度は柔らかだが、未央は嫌われているはずだった。

「先日、倉本さんにはいろいろとお世話になりました」

どう言えばいいのか分からず無難に答えておいた。

「ほう、俊しゅんいちくんが女性にお世話を。それはそれは……」

倉本は未央の肩に手を置くと絵のほうへ向かせた。不意に触れられ、未央の心臓が跳ね上がる。

「豊田さん、お客様がお呼びですよ」

「あ、はい。ただいま参ります。俊しゅんいちくん、くれぐれも失礼のないようにね」

「大丈夫です。商売頑張ってください」

にこりと笑う倉本に豊田は肩を竦すくめ、未央に会釈せしやくをしてから接客に戻っていった。

倉本は未央の肩から手を離さない。男の人の頼もしい温もりが直に伝わり、未央の全身が火照ってくる。

(本当に再会できたんだ。しかも、彼から声をかけてくれた)

夢心地にふわふわと浮遊しそうになるが、肩には手のひらの重みと体温。触れられているという実感があつた。

「さて、中森さん。君はこの絵に見入っていたけど、その理由を聞かせてくれないか」「え……?」

思わぬ質問だった。絵というののもちろん、目の前にある蒼の海景画である。ようやく肩を解放した倉本に、未央は顔を向けた。

「いや、額装されずキャプションもない地味な絵を、たいていの客は素通りする。君はどうして立ち止まったのかなと興味が湧いてね」

「そ、それは」「うん、どう感じた? 何が君の足を止めさせた?」

まっすぐに見つめてくる眼力に未央は気圧される。なぜそんなことを訊くのか分からない。それに、あまりにも熱心な様子にどきどきしてしまう。

未央は絵に意識を集中してときめきを誤魔化すと、感じたままを答えた。

「この作品は、端正な構図で描き込みにも一切の無駄がありません。とてもきれいな

ですが、青系でまとめられた色調は冷たい印象を与えています」

倉本が深く頷くのが目の端に映る。ここまでの感想は彼にとって予想の範囲内のようにだ。だがここから先はどうだろう。未央が視覚ではなく感覚で捉えた印象だから、もしかしたら見当違いかもしれない。

「それだけ?」

未央が黙ると、倉本が横から覗き込んできた。まだ何かあるんじゃないかと、長いこと絵に見入っていた理由を追及したがっている。

「いえ、それなのに、とても不思議なんです」

「……不思議?」

「はい。ひんやりとした夜の世界なのに、今にも溢れ出さんばかりの光や熱が感じられる。熱……そうです、それは人間の情熱だと感じます。蒼い景色の奥深くに、怖いほどのエネルギーが渦巻いている。そう感じます。強く!」

言葉を紡ぐうちに、ついつい声も高くなる。一枚の絵を謎解きした興奮で未央は昂つていた。

「あつ、すみません」

再び展示室を騒がせてしまい周囲に詫びる未央を、倉本はじつと見つめている。今の言葉に嘘はないか、本気で言っているのか。そんな、真意を探るような眼差しだった。

「驚いたな。まさか君のような人がそういう捉え方をするとね」
 穏やかな反応に未央は安心するが、『君のような人』という表現は気になる。
 倉本は、そんな未央の心情を察したのか言葉を足した。

「いや、悪い意味じゃない。君はすごく、その……素直な見方をしただから」
 素直――

『単純』とか『馬鹿正直』とか、そういった表現をオブラートに包んだのだろう。それでも、あの日以来自信を失くしていた未央には、嬉しい肯定の言葉だった。

「うん、今の感想は面白い。当時の俺に聞かせてやりたいよ」

「そうですか、当時の……」

復唱しかけて首を傾げる。

「当時の俺、ですか？」

倉本は意味ありげに笑い、海景画の右下隅を指差した。そこには制作者のイニシャルが記しるされている。

S・K――

「誰だと思う？」

顔を寄せてくる彼に動揺する未央だが、それは明快なヒントだった。

「シユンイチ・クラモト……って、まさか本当に？」

この人が、この絵を描いた本人！

未央は激しく驚きつつ、何度も絵と倉本を見比べた。どうしても両者が結びつかない。

「俺が絵を描くのが、そんなにおかしい？」

「いえっ、そうじゃありません。でも、イメージが少し違う気がして」
 視覚で捉えた『冷たい』イメージは、クールな彼にぴったりだ。

でも、その裏に未央が捉えた『情熱』は彼に重ならない。

首を傾げる未央に、倉本はさもあらなといった顔でその疑問に答えた。

「これを描いたのは十七歳の俺。あの頃は不合理の塊かたまりだったな」

「十七歳？」

倉本の告白にシヨックを受ける。大人びた画風から、成人作家だと思い込んでいた。こんな作品を十代の少年が描くなんて。

(でも、どうして倉本さんの作品がここに？　そもそもオーナーとはどんな関係なの？)

豊田さんには下の名前と呼ばれていたけど)

訊きたいけれど、そこまで踏み込んでいいものかどうか迷う。彼が何を考え、未央に声を掛けたのかも謎だった。あんな出会いをして、お礼の申し出も断られ、『今後君と関わるつもりはない』と意思表示されたはずなのに。

「ところで、君は雨宿りでここに入ったようだけど、小降りになってきたよ」

「え？」

急に話題を変えられ戸惑いつつ窓を見ると、空が明るくなっている。

「じきに止みそうだ」

「え、ええ」

確かにそのとおり。それにしてもなぜ、急にそんなことを言うのか。

未央は倉本を窺った。

窓に向けられた横顔は、もう帰っていいよと未央を突き放している。絵の感想を聞きたかっただけ。もう君に用はない、と。

先回りして考えるのは、期待して傷付くのを恐れる自己防衛だった。

でも、きつとそうなのだと、未央は納得する。偶然の再会に舞い上がったのは未央だけであり、その証拠に彼の態度は冷静そのもの。嬉しそうな気配など微塵も見当たらない。

（そうだ、『帰れ』と言われたら逆らわずに『はい』と返事をしよう。この人は私を何とも思っていない。この再会は神様のいたずらだ）

雨風に乱れた髪やメイク、濡れたワンピースが惨めだった。今までこんな姿を晒していたのだ。彼との再会を夢見て気合を入れてお洒落した。身の程知らずな妄想に駆り立てられて。

「雨が止むまで、お茶でも飲もうか」

「はい……」

泣きそうになりながら、ゆつくりと彼を見返す。

倉本は画廊の奥にある『Café de Galerie』と書かれたドアを指差している。

（今のは聞き間違い？ お茶を飲むって、私とこの人が……）

信じられず、未央は確認した。

「い、いいんですか？」

「もちろん、君がよければね」

無意識に手の甲をつねり、夢ではないことを確かめる。狸の置物に誘われたのではない。狸が化かしたのでもない。

「それじゃ、行こうか」

彼となぜお茶を飲むことになったのか、まだ信じられないまま、未央はついて行った。

カフェは展示室の半分ほどの面積だが、天井が高いため狭くは感じない。控えめにクラシック音楽が流れ、ゆったりと寛げる空間になっている。客は初老の男性が一人と、大学生風の男女がひと組だ。

未央は窓際の席に倉本と向かい合って座ると、店内を見回した。

カウンター席の他、窓際に四人掛けのテーブルが三席並んでいる。中央に置かれたパレットを模した楕円形のテーブルは、椅子を詰めれば七、八人ほどが利用できる大きさだ。

（あのテーブルで私達学生は教授を囲み、芸術について語り合った。ここでお茶を飲む時の教授はいつも機嫌がよくて、学生の質問に何でも答えてくれたっけ）

カフェオレの甘い香りが漂ってくるようだった。未央も他の学生達も、教授の真似をしてよくオーダーしたものだ。

未央は倉本に渡されたメニューをしばらく見つめていたが、カフェオレではなくプレンドを頼んだ。

同じくプレンドを注文した倉本に視線を戻す。足を組み、悠々とした態度でこちらを見ている。いや、観察しているといってもいい、遠慮のない視線だった。化粧の崩れた顔を直したいと切実に願う未央だが、時既に遅し。せめて姿勢だけでもとまっすぐに伸ばし、膝の上に指を揃える。

きちんと倉本と向かい合って思い出したのは、国枝アート工房での一件だった。

「倉本さん、先日はご迷惑をおかけしてすみませんでした」

あらためて詫びる未央に対して彼はほとんど表情を変えず、首を横に振った。

「この前も言ったけど、あれは俺にも都合良かった。国枝先生は俺のような若造をまと

もに相手にしない。しかしああいった現場を押さえれば弱みになるだろう」

未央の推測どおりだが、倉本の言い方はいかにもクールだった。まるで、メリットがなければ助けなかったと言わんばかりの淡々とした口調。

「上司の名前を出す前に、どんなきっかけでもいい、主導権を握りたかったんだ」「そう、だったんですか」

店員がコーヒーを運んできた。

未央はクリームと砂糖を入れたが、倉本はストレートのまま口に含む。

沈黙が二人の温度差を際立たせるが、未央にはなす術もない。未央の恋愛感情を、おそらく彼は承知している。だからこそ『君を助けたわけじゃない』と念を押すのだ。

「ところで、さつき豊田さんと話してたこと。ここに来たのは久しぶりだとか」

倉本はカップを置くと、唐突に訊いてきた。テーブルに身を乗り出した彼の顔が近付き、未央はどきっとする。

「はい。すっかりご無沙汰してしまっただけ。大学を出てから初めてです」

「炭窯教授の教え子ということは油絵専攻だね。絵はやめたのか？」

いきなり痛いところを突いてきた。もちろん倉本にそんなつもりはなく、世間話程度の質問だろう。それでも未央は動揺した。

「え、ええ。描く場所ありませんし」

「場所？」

「はい。私の住むアパートは狭くて換気も悪いので油絵具や溶剤の匂いがこもるんです。部屋に匂いが染み付いても困るし、油絵は無理なんです」

この理由は嘘ではない。未央はためらわずに答えたが、倉本は納得しなかった。彼は絵画制作に関する知識を持っている。

「微香性の絵具もあるだろう。画材屋さんなら専門のはずだ」

「そつ、そうですけど、私の場合油絵を描く画材の、あの独特の匂いが好きなので。匂いがしなければ絵具ではないというか……」

ちよつと苦しいがこれも本当のこと。それでも彼はなぜか執拗しつように問い詰めてくる。

「絵画教室とかレンタルのアトリエとか、場所ならいくらでもある。理由はそんなことじゃないな」

断定されてしまった。そもそも相手は大企業のエリート営業マンで、未央とは観察眼のレベルが違う。本当のことを言っていないことは、お見通しなのだ。

倉本は椅子の背にもたれかかり、未央が口を開くのを待っている。その無理に聞き出すそうとはしない姿勢に、未央はかえって焦燥感を募らせた。

彼と初対面の日、どしゃぶりの雨の中ポーチに取り残された惨めみじさが蘇よみがえってきた。

「それは……」

「それは？」

口ごもる未央を射るように見つめ、答えを促うながす。

「炭窯教授に言われたからです」

「なんて？」

こんなこと、美大の仲間はもちろん親にすら話したことがない。ささやかな矜持きやうじを保つため、自分の中に閉じ込めていた。それなのに唇が開いていく。問われるまま、誘われるままに。

「卒業制作展に出品した私の油彩画を見て、『君の絵はつまらないね』……と」

——言った。言ってしまった。

絵画制作に懸命に取り組んだ四年間。その集大成となる最後の作品だった。

落とされたのは、誰よりも尊敬する人からの爆弾。思い出すたびに苦しんできた、夢を粉々に破壊した残酷なひと言。

それなのに、トラウマになっていたそれを目の前の彼に言ってしまったことに、未央自身が驚いている。

「なぜですかと尋ねると『自分で気付かなければ意味がない』と突き放されました。私の作品が他の学生より特に劣おとついているとは思えず、どうしても納得できなかった。でも、私にとって教授は絶対の存在で、認めざるを得ませんでした」

「……そうか」

倉本は冷静だった。同情も軽蔑も、励ましも慰めもなく、ただ事実を受け止めている。意外にもその反応は未央にはありがたかった。

だから続けて話した。これまで抱えてきたものを出してしまっても、この人なら大丈夫。まるで、鏡に話すような気持ちだった。

「企業に就職しても画家になる夢は持ち続けようと決めてたんです。でも、教授の言葉を引きずって油絵を描けなくなっていました」

夢をあきらめたのを教授のせいに行っている。君は弱いと指摘されても仕方がないが、倉本は何も言わない。

雨雲が流れ去り、太陽の光が窓から射しこむ。倉本はテーブルから身体を引くと、未央をもう一度観察してきた。さつきよりも興味深そうな顔つきで見回している。

「あの、私……ごめんなさい。余計なことまで喋って」

教授のひと言に人生を左右されるなんて、彼からしたらとんだ甘ちゃんだろう。さすがに呆れたのかもしれない。おそらく彼は誰にも影響されず、すべて自分で決める人だ。

「それでも、君は今日ここに来た。偶然の雨宿りとはいえ、炭窯教授に縁の深いこの画廊に飛び込んで来たよね。君はほとんど克服してる……って言うより、克服したいと望んでるんじゃないのか」

倉本の思わぬ言葉に、未央は俯きかけた顔を上げる。

憂鬱な自分を打破したいなら変わらなくては。過去に囚われていては夢も持てない。

それは倉本に出会ったことにより、胸に湧いてきた希望だった。

ときめきとは別の興奮が未央を支配する。震える手で飲みかけのコーヒーを持ち上げた。

「そうかもしれません。言われてみれば」

「君の中で変化があったんだろう。それもごく最近」

未央は黙ってコーヒーを飲んだ。当の本人に言われては返事のしようもない。熱くなる頬をカップで隠しながら、どうして自分はこうなんだろうと嫌になっってしまう。

倉本は未央が彼に向ける想いに勘付いているだろう。今の言い方には、からかいのニュアンスがあった。

何を考えているのかよく分からないが、初めて会った日のような不愉快オーラは発していない。それが未央には唯一の救いである。

「君は素直で真面目だな。それに面白いよ」

「……は、はあ」

面白いとはどういう意味だろう。未央は曖昧に頷きつつ、そういえばと思い出す。

倉本の絵について感想を述べた未央に『今の感想は面白い。当時の俺に聞かせてやり

たい』と彼は言った。とても楽しげな様子だった。

(いい意味に解釈すべきかしら。うん、そうよね)

未央がコーヒーを飲み干すと同時に、倉本が窓に顔を向けた。目を細めるのは眩まぶしいからか、微笑んでいるからなのか判然としない。

「俺の自宅に使っていないアトリエがある。良かったらそこで絵を描かないか」
彼は横顔のまま、ひとり言のように呟いた。

——ミステリアスな申し出だった。

倉本は、よく分からず戸惑っている未央に向き直った。

「亡くなった祖父が画家でね、アトリエ付きの一軒屋に住んでいた。祖母も亡くなり住人がいなくなったその家に、今は俺が一人暮らしというわけ。親父はいずれ処分するつもりらしいが、それまで住まわせてくれと頼んだんだ。もったいないだろ？」

「それは、はい。そうですね」

未央にはどんな建物か想像できないが、まだ住める家なら確かにもったいない。

「俺はもう絵を描かないし、アトリエは手入れもせずほったらかしだ。ちょうどいいから君に貸してあげるよ」

倉本の祖父が画家であったことを知り、驚いた。が、それよりも驚かされたのは、彼の申し出そのものだった。

(私が倉本さんのお宅におじゃまして絵を描く。一人暮らしの彼の家に上がり込んで?)
そんなことをサラッと saying てる彼の真意が謎だった。表情からは何も読み取れない。口調もいたってクールで、他のことを話すのと変わらないように聞こえる。

未央はほのかな期待を抑え込みながら、彼に質問した。

「でも、倉本さん。私はあなたと出会って二度目で、なんていうかその……なぜそこまで」

「見たいからだ」

質問を予測したかのような早口で、彼は答えた。

「君の絵を見たい。教授につまらないと評され絵をやめてしまった、そんな君が今描く絵がどんなものか興味があるんだ」

「私の絵？」

「そう、過去ではなく現在の君が描く、油絵だよ」

なぜ倉本が自分の絵に興味を持つのか分からないが、明らかにになったことがある。それは——

「アトリエを提供する理由はそういうこと。母屋おちやとは別棟になってるし、心配しなくていい」

ほのかな期待はあっさり消し飛ばされた。

心配するなど言うのは、期待するなど言うこと。彼は未央の質問の意図を察し、やりと退けたのだ。

「どうする？ 無理にとは言わないが」

あらためての誘い水に、未央はいじけた。相手の「弱み」を利用してことを運ぶのは、彼の仕事のやり方と同じだ。仕事も恋も、この人には駆け引きなのだ。

「なんだか悔しくて、素直に返事ができない。」

「倉本さんは良いんですか？ たとえ別棟でも、その……女の人を家に入れるなんて」

「何が？」

「怒られませんか、彼女とか」

言っただけで未央は後悔する。今のは恋人の有無を確かめる質問だ。

耳を押さえたい衝動に駆られた。いるに決まっている。でも、はっきりと知りたくない。爪の先ほどの希望もこれで潰えてしまう。

「その心配もないよ。いないから」

「……」

「いない——と、聞こえた。彼女はいないと。」

「そうなんですか？」

信じられなくて確認する未央に、倉本は「ああ」と頷いた。

（喜ぶのは無意味かもしれない。でも……）

たとえ期待できなくとも、傍にいられる。希望は残されたのだ。

ミステリアスな申し出に、未央は応えていた。

どこをどう歩いてアパートに帰り着いたのか記憶がない。

こんなこと、あるはずがない。たった一日出かけただけで、こんなにもめまぐるしい展開になるなんて。

朝出かけた時と変わらない部屋。

だけど、姿見に映るのは今日一日を過ごした自分。化粧はほとんど落ちてしまい、髪型も崩れている。新調したワンピースも、古着のようにくたびれてしまった。

未央は、とりあえずシャワーを浴びることにする。

雨と汗に濡れた身体を洗い流し、部屋着に着替えるとようやくリラックスできた。冷たい緑茶をグラスに注いでごくごく飲む。熱を持ち混乱していた頭もクリアになった。バッグからスマホを取り出すとベッドに腰掛けた。倉本俊一の電話番号とメールアドレスが登録されているのを確かめ、ぎゅっと胸に押し当てる。

一週間前は名刺ももらえなかったのに、今日は個人的な連絡先を交換してしまった。

「倉本さん……」

彼の横顔を臉に浮かべても、真意は見えない。
未央はふらふらと窓辺に寄って、カーテンを開いた。いつの間にか日が暮れていて、民家の窓々に明かりが灯っている。
見上げた夜空には雲ひとつない。

(そういえば、今夜は七夕だわ)

これなら、織女星と牽牛星は再会を果たせただろう。七夕の夜空が晴れるなんて珍しいと感激しながら、街明かりに隠された二つの星を思った。

「よし、私だつて彼と再会を果たしたんだから」

未央は気合を入れてスマホを構えると、メールを打った。これから先どうなるのかなんて予想もつかない。だけど、逃げないで前に進んでいこう。

——倉本俊一様。今日は大変お世話になりました。ありがとうございます。約束どおり七月十五日にお伺いします。よろしくお願ひ申し上げます。

数分後、メールの着信音に未央は全身で跳ね上がる。

——了解。こちらこそよろしく。

素つ気ないところが倉本らしい。未央は微笑むと、天国の門か地獄の門か分からぬままに扉を開き、始めの一步を踏み出していた。

立ち読みサンプルはここまで

未央を苛んでいた憂鬱は、梅雨明けとともにどこかへ消えてしまった。心は嘘のように晴れ上がり、夏空が広がっている。

(今日はこの格好でいいのよね)

未央はバスに揺られながら、Tシャツにスウェットパンツという動きやすい服装を見下ろす。

昨夜倉本から『初日はアトリエの掃除をする』とメールがあった。

もう少しきれいな洋服を選びたかったのだが、不必要に洒落めかして出かけたらしたら、やる気を疑われてしまうだろう。

(今日、というよりこれから……か。絵を描きに行くんだから)

倉本はアトリエを貸すと言った際、賃料は無用だときっちり伝えてきた。

『その代わりアトリエに来た時に空気の入れ替えや掃除をしてくれればいい。家は使わないと傷むからね。メンテナンス料と相殺しよう』

それでも払わせて欲しいと申し出たのだが、彼は頑として聞き入れなかった。

あまりの好条件にたじろぐ未央だが、そこまでしてもらってはいいい加減なことではできない。倉本の『君の絵が見たい』という望みの真意は謎だが、親切心には精一杯応えた。

(そう、私は絵を描くために彼の家に行くんだから)